

教文通信写真館

ニホンカモシカ 2023\_06\_06  
松本市安曇 林道安曇奈川線



写真とエッセイ:木下通彦さん(生物教育研究会 飯田 OIDE 長姫高校)

長野県内ではシカが増え、ニホンカモシカに出会う機会が減ったように思います。  
続きは5P

# 教文通信

発行所  
長野県教育文化会議  
発行人  
寺尾 真純

## 今号の記事

- 01 家庭科教育研究会  
総会・全県夏の学習会
- 02-06 支部教研
- 06-07 教育課程研究協議会
- 08 県教研

11月2日(土)、(理科は3日(日)も)・・・**県教研**  
上伊那農業高校で、伊那中学校で、  
そして、画面越しにお会いしましょう  
実参集、オンライン、ハイブリッドでの実施です



家庭科教育研究会の全県学習会は128回となった。かつては春夏冬と行われていた時期もあったが近年は年一回行っている。コロナを超えて、今年は、8月5日、丸子修学館高校にてハイブリッドで行い、35名とオンラインで8名の参加があった。



## 家庭科教育研究会 総会 全県夏 学習会

「考える被服製作」謎解き被服製作の指導法」として深い学びにつながる実習の在り方について研修した。ワークシート(二つ折りで開くまで何を作るかまだ分からない)が配布され、「本日は本を入れる巾着袋を作ります」と、謎解き実習が開始。小清水先生よりワークシートの説明後「先生同士で聞いたり教え合わないでください。教えてしまうことは生徒の学ぶ機会を奪うこととなります。先生方もそれぞれ考えて製作を進めてください。」その後は生徒になって、縫う姿勢を確認するためスマホで撮影したり、謎を解きながら黙々と手を動かし製作した。

総会には教文事務局の内堀先生からご挨拶いただき、入試制度、教員調整額や働き方、不登校生の学びについて等の情勢報告をいただいた。学習会には、静岡大学の小清水貴子氏に講演「これからの家庭科教育を捉える視点」とワークショップ





■全体会

遠隔授業を考える模擬授業 (参加者13名)

「多様な学習ニーズに対応した柔軟で質の高い学びの実現について」の概要を説明。通信教育・遠隔授業のメリット・デメリットを考え、遠隔授業をするなら、どんな事が考えられるかを試行錯誤しました。先生役・生徒役・自宅生徒役から見えてきたものは？

教員用として、授業用タブレット・遠隔用タブレット・板書撮影用カメラと三脚・配布プリントを、別室受講生徒用としてタブレット2名分を確保しておこないました。

■模擬授業の試行錯誤のポイント

- ◎ 休み時間10分以内に、授業のパワポの準備・遠隔授業用の生徒を見るためのタブレット準備・板書撮影の準備ができるのか？
- ◎ 板書のカメラは別室の生徒に見やすく映っているか？ 音声は？
- ◎ 別室で受講している生徒も含めて短時間で出席を確認できるか？
- ◎ 教室生徒の反応の様子と別室生徒の様子や質問を、同時進行で見られるか？
- ◎ 実験の様子配信、生徒に伝わるか？カメラワークの要望に応えられるか？
- ◎ パワポを黒板に写しながら、別室生徒にも配信できるか？ などなど

■やってみた感想や様子

◎ こういった方法がある、ということがよく理解できました。参加人数が多いと教科毎の対応も話し合えそうですね。但し、定数を増やしてもらえなければ、定期的に取り組むのは無理だということも再確認できました。

◎ やはり機材準備や画面の向こうの生徒とのやり取り、教室で受講する生徒へのフォローなど一人では難しいと感じた。各家庭の接続状況はバラバラのため、きちんとした環境が整うまでこちらから確認や説明をする必要があることも想定される。例えば機材・通信担当、生徒監督担当などチームティーチングでの体制が望ましいと感じた。

◎ 難しかったです。  
◎ 双方のやり取りを確保しながら、教室にいる生徒と遠隔授業の生徒の両方に配慮しながら授業をすることの大変さが実感できてとても良かったです。

◎ 実際にやってみることで発見できたことが多くあった。準備や片付けを休み時間の10分間でやるのは大変なこと。画面共有をすると生徒の反応が見られないこと。具体的には、手持ちのタブレットの画面を電子黒板に映したうえで生徒と画面共有をしながら別のタブを開くと、教員は Google Classroom の画面が見られなくなり、生徒の反応にほとんど気づけなくなってしまった。それが予想外だった。

◎ 授業者は目の間の生徒中心に見てしまうので、オンラインの生徒への対応は遅れてしまったり、見逃してしまったりしてしまうと思う。授業者一人では

はなく、少なくとも二人対応となり、教員の負担は増すと感じた。

◎ 結局あーだこーだやっている内に時間が過ぎてしまったが、こういう試行錯誤が必要。良かったです。

◎ オンライン授業を受ける側の視点に立つと、見えづらさ、聞こえにくさ等様々な不具合が見えた。試しにやってみてよかったです。

◎ やってみて良かった。どう大変なのかよくわかった。各教員が休み時間内で準備片付けをするのは現実的ではない。該当者がいるクラスは機器をフィックスにする等対応をする必要があると思う。

■まとめ

カメラ位置や、カメラワーク、板書やパワポなどの授業の展開の把握、資料配布と配信手配、生徒たちの反応の確認等。テレビ局が何人もかかって作っている番組を、生中継で一人でやるようでした。質の高いオンライン授業をやるのは、とって大変だとわかりました。今後の遠隔授業のヒントになったのではないのでしょうか。

■分科会

- ◎ 国語研究会「学習指導要領から考える主体的な学び」
  - ◎ 外国語研究会「授業実践の交流」
  - ◎ 家庭研究会「保育分野における授業実践」
  - ◎ 数学・理科合同研究会「レポート発表」
  - ◎ 青少年文化研究会「課題別の今年は、ALL青少年文化研究会」
- (高水須坂支部 綿貫 京子)

**■全体会**  
 全体会では、長野県ご出身の世界の台所探検家、岡根谷実里さんを講師に迎え、オランダからのZoom講演会を視聴しました。岡根谷さんは、世界各地の家庭の台所を訪れて一緒に料理をし、料理から見える社会文化背景を伝えていらつしやいます。「ブルガリアは本当にヨーグルトの国？」や「アボカド大国（メキシコ）の食卓にアボカドのぼらなくなる？」といったトピックで、現地での料理写真を交えながら、当時の思い出や、疑問を持ったきっかけ、さらにはそこからご自身で歴史や文化、社会背景などを探究した話をとても分かりやすくお話ししてくれました。視聴した先生方が、また聴きたい！生徒たちにもぜひ聴かせたい！と太鼓判を押してくれました。著作である『世



**更埴支部**  
 9月21日 篠ノ井高校

9月21日、更埴支部、支部教研が開催されました。今年度は篠ノ井高校を会場に、全体



■**教科別分科会**  
 また、教科別分科会では、社会科と理科研究会合同で「善行寺地震」を題材に交流を深め、実際にフィールドワークに向かったり、家庭科研究会では、千曲市のGroover Leatherさんというお店でレザークラフトの研修会を行ったりしました。美術科研究会では、各校授業作品を持ち寄り、評価の扱いを検討しました。また、国語科研究会では、新教育課程における評価について、各校の課題と工夫を交流しました。分科会実施の教科も年々少なくなり、全体会参加者も少人数ではありますが、会場校の参加者が毎年多めなのは、忙しい先生方のせめてもの優しさだと感じました。  
 (更埴支部 伊藤 直弓)

9月14日に「今、わたしたちが大切にしなければならぬものは」というテーマで上伊那教研集会を実施しました。コロナ前と同じ、久しぶりの対面でのまるごと開催です。

今の日本の公教育の危機、なんとなく感じていた違和感を言葉にさせていただき、さらに今後の希望もお話ししていただきました。日々の業務に「教育」とは何かを考える暇もなかったですが、今回の講演を聞いて改めて教育にかかわる私たちの仕事の魅力と価値観を考える機会になりました。優しく穏やかな口調で熱いお話をしてくださり、多くの参加者が魅了されました。会議室はパンパンでした。



全体会 記念講演 講師  
 鈴木大裕さん (教育研究者)

**上伊那支部**  
 9月7日 箕輪進修高校

■全体会・講演会

午前の講演会は「参加と共同の学校づくり、地域と子ども」研究会とのコラボ開催という形をとりました。ハイブリッドで遠方の方や、一般の方達にも地域の新聞などで広くよびかけ、本部からも宣伝していただきました。今の教育に閉塞感を感じ、疲れ切ってしまった、私たち教職員に少しでも元気を分けてもらおう、ということ考え、「崩壊するアメリカの公教育」の著者である、教育学者の鈴木大裕さんに遠く高知県・土佐より来ていただきました。大裕さんには、たっぷり90分、「遊びのないところに新しい世界は生まれにくい」という演題で、穏やかな口調で、しかも熱く語っていただきました。会場は大裕ワールドと化し、対面でお話を聞く醍醐味を味わいました。

■分科会

午後の各分科会では、日ごろの授業実践を語り



素敵な作品が数多く展示されました



高校生も発表しました



実践発表あり、研究発表あり  
実習あり、の充実の分科会



合い、横のつながりを感じられた時間となりました。想像以上に多くの方に参加していただき、参加者のほとぼしる教育への思いを感じる事ができた一日となりました。

参加者は講演会に、一般の方20名(他地区の先生、高校生含む)、午後の部も入れて上伊那の教文会員67名、参加者は延べ合わせて87名と、盛況でした。(その他、オンラインで講演会を視聴は3人でした。)その中で、教職希望だという高校生が、午後の教科別「英語」、課題別「参加と共同の学校づくり」にも一日、参加してくれ、そこで、自分の意見を堂々と述べてくれたのにも感動しました。

■まとめ

以下、アンケートに寄せられた感想を抜粋して載せておきます。

【講演会について】

・現場の肌感覚にぴたり合った講演内容で、大いに考えさせられました。現在の教育問題にそった講演会だったと思います。・とてもわかりやすい内容だった。横文字、カタカナのない講演でし

教文通信写真館エッセイ(続き)

1980年代から90年代にかけカモシカによる植林木の食害が問題となり、天然記念物でありながら駆除の対象となりました。その当時、長野県内ではシカに会うより圧倒的にカモシカに会う機会のほうが多かったように思います。2000年代に入りシカがそれまで見られなかった地域でも見られるようになり、シカによる農作物への被害も多くなりました。それと同じようにクマやイノシシの被害も多くなったように思います。シカが分布域を広げるようになった頃からカモシカに会う機会が減ったように感じます。



動画 <https://youtu.be/enlqsDOKTG8>

た。図書館は学校の中で「あそび」だと感じました。まだ、図書館にできることはあると思います。・教育現場が多忙化により、忙殺され、教育の価値、学校という存在の意味を見失いがちである。私たちはその中で、講演の中にあつた、「構想」と「実行」を結びつけられるようにすること。それが、教員としてのやりがいや、働きがいを感じるようになること。そのために、自分の中の「すきま」を大切にしていきたい。・とても魅力のある方で、お話の内容にも引きつけられました。一般の方が参加してくださった反面、教員の参加がもっと多くていいのに、と思いました。・期待通り、明快でわかりやすく、私たちの思いや活動を肯定していただき元気をもらえた。・わかりやすく、また自分の中での教育観が不安でしたが、間違っていないかっただんだと思えました。勇気と今後への希望をもらいました。ありがとうございました。

(上伊那教文会議 議長 中村富貴子)

10月5日(土)に、諏訪支部教研が開催されました。講演会は、この地域で長年に渡りフリースクールを運営されてきた小池みはる先生をお迎えしました。ちょうど「多様な学習ニーズ」学び」が始まり各校手探りで方法や評価を迫られる中で、不登校生徒の話題はタイムリーでした。現在22か所ある県内フリースクールの現状、学校とは異なる生徒とのスタンスなど、事例を交えてお話しくださいました。学校というシステムに嵌ることのできなかった生徒や保護者の抛り所として、様々な表現活動を通して成長を見守っている様子が伝わりました。メタバースフリースクールも模索中とのこと、今後、学校以外の選択肢としてフリースクールの存在が増すと共に、学校との連携も望まれてくることを感じさせられました。その後、分科会でそれぞれ討議が行われました。本音を交えた情報交換を通して楽しく刺激を受けたという感想が寄せられ、官製研修にはない教文の良さを再認識しました。しかし一方、参加者の減少傾向は歯止めがかからない状況で、今後の支部教研の存続が危惧されます。研修の火を消さないために、教文活動も変容が迫られていると感じました。

(諏訪支部 藤澤 秋津)



(7) 公正性は担保されるのでしょうか。評価対象となる生徒の家庭の経済資本、文化資本、教育資源の格差がある中で、「主体的に学習に取り組む態度」等の評価の公正性を担保することはできません。

(8) 評価が学習指導、生徒指導的な機能を果たしてきました。今回の評価方法の導入により、やる気をアピールし、器用にふるまう生徒が良い成績を取ることが考えられ、保護者は、観点別評価やそれを基にした総合評定に不透明性や不公平感を感じ、学校に不信を抱く問題が生じる可能性があります。

(9) 2001年学習指指導要領以降、「目標に準拠した評価(いわゆる絶対評価)」が採用された。学校では、評価が主観的にならないようにするため、目標にどの程度達しているかを示す材料・資料集めに追われ、「評価疲れ」の状況が生まれている。三観点区分にそって生徒の応答や作業に対する評価チェックをしながらの授業となり評価の肥大化が授業指導を困難にすることが心配されます。

(10) 観点別評価、先にありきで、評価結果を導き出すためのパフォーマンス課題が教科ごとに実施される逆転現象が起きます。パフォーマンス課題は筆記による、エッセイ、小論文、歴史新聞、観察記録、実験レポート、物語、脚本、詩、曲、絵画、また実演による朗読、口頭発表、プレゼンテーション、グループでの話し合い、演劇、ダンス、曲の演奏、彫刻、スポーツの試合などが用意されることとなります。ポートフォリオ評価により長期的に学習活動等の見取りが行われますが、一層の教育活動の多忙化を招くことになることが危惧されます。

(11) 「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」(2019年1月)で、分析評価と総合評定にかかわって、「CCA」「AAC」といったばらつきが基本的には出ないとしているが、根拠に論理性がありません。具体的な評価、評定付けの手順について現場の裁量としているが、論理的に理解できない評価方法を現場任せにすることは無責任です。

(12) 目標として掲げ形成的に評価しても、評定(成績付け)するべきではありません。生徒が息苦しさを感ずる評価に成長を促す意味はないと考えます。

(13) 評価は、生徒をエンカレッジ(励まし・元気づけ・自信づけ)し、動機や意欲を高める働きかけをするべきで、この評価は形成的評価の中で行われる大切な教育活動です。しかし観点別評価では、学習態度を独立した1つの観点として評価、評定するため、生徒は学習態度の指標、目標を演じる態度主義に向かい、目指すべき意欲や動機を高めることができ辛くなるのが危惧されます。形成的評価における評価を評定(成績付け)とは切り離すべきだと考えます。

VI. 「探究的な学び」、「総合的な探究の時間」について

※総則特活レポート、各教科レポートは、教文通信デジタル版34号に掲載します。

# 2024 教育課程 研究協議会

9月2日から13日まで県下4地区で教育課程研究協議会が開催されました。教文会議の教科研究会から意見発表をして協議に参加しました。伝達講習会ではない、協議の場としていくことが、教職員の主体的で自由な教育活動のために大切です。2024年度の教育課程研究協議会、総則・特活分科会では文科省中央説明会報告と観点別評価、「総合的な探究の時間」について研究協議が行われました。教文会議から8分科会で延べ29人が意見発表をしました。以下は、総則・特活分科会で発表した教文会議の観点別評価に関するレポートの抜粋です。

## 2024年度教育課程研究協議会 総則・特活意見発表（抜粋）

教文会議

- I. はじめに—1947年「学習指導要領（試案）」序論
- II. 高等学校新学習指導要領について
- III. 教文会議の共通教養論と統一的高校像の追求
  1. 共通教養
  2. 自前の教育課程づくり
- IV. 学校づくりの5つの課題
  - ア. 生徒が生き生き学べる「授業づくり」の課題
  - イ. 生徒の学びの場としての「集団づくり」の課題
  - ウ. 同僚性を育む「職場づくり」の課題
  - エ. 参加と共同の「学校づくり」の課題
  - オ. 学校の存在基盤としての「地域づくり」の課題
- V. 観点別学習評価に関する課題

観点別評価には課題があり、無批判な活用は生徒と教職員の間に問題を引き起こすことが危惧されます。また観点別評価が評定に換算され生徒の進路における公的な資料として使用されることにおいて、生徒や保護者に対して透明性を確保する必要があります。

観点別評価に関わる基本的な認識として、評価者（教職員）と被評価者（生徒）の関係において、「教員を管理者や利害関係の優位者の立場と評価項目の内容・方法に馴化させ、教育観と子ども観を変えていくことと同時に、子どもを被管理者や利害関係の弱者の立場へと、また評価項目の内容・方法の受容・内面化をさせ、全体として学校観と社会観を変えていこうとするもの（変質させるもの）」と捉える必要があります。評価を介して教員と生徒は「利害関係者の関係に組み替えられると同時に、管理者・被管理者の関係に組み替えられてしまった」との指摘を心に留めるべきだと言えます。学習評価が生徒の成長に寄与するのではなく、生徒の資質さらには学習に対する態度の在り方を画一化し人格形成がゆがめられることになることは避けられなければなりません。

### 1. 観点別学習評価の課題と視点

(1) 「資質・能力」論において、「暗黙裡に最も重要視」するのは教科内容を媒介しない「態度」です。二つの観点、「知識・技能」「思考・判断・表現」と切り離して、「学習態度」の達成目標を生徒に明示し、学力達成度の1指標として評定に加算することは、一方的に「望ましいと定めた振る舞いや心構え」を生徒に押しつけることになります。態度主義の学力観に問題があります。

(2) 「態度」評価は、人格と直接に結び付いた価値意識や思想、関心の多様性、政治的な立場など個性的で自由な発達を尊重する教育を妨げ、生徒の人格への干渉、統制、管理の授業や評価となりえます。

(3) 性向や人間性といった情意領域については、価値規範、道徳的価値に係るものはプライベートな性格が強いため、全人評価による価値観や生き方の押しつけにつながる恐れがあります。

(4) 「主体的に学習に取り組む態度」の評価イメージの評価軸の値が明示されていません。評価者の主観による評価になり、これで客観性を担保することは不可能です。観点別評価と総合評定という評価制度に内在する構造的な問題があります。

(5) 「妥当性」は担保されるのか。「主体的に学習に取り組む態度」を評価の対象とすることはできず、評価の妥当性は確保されないと考えます。

(6) 「信頼性」は担保されるのか。「評価者間信頼性」（評価者が異なっても同じ採点が行われるのか）と「評価者内信頼性」（同じ評価者が一人の子どもを何度か評価しても同じ採点になるのか）を担保することは可能なのでしょうか。教科基準が教職員ごとに異なることをどのように解消するのか不明確です。

# 2024 県教研

長野県教育研究集会

11/2 (土)

全体集会・記念講演

🕒 10:00 ▶ 12:00

「ままならない体と生きる」

講師 伊藤亜紗さん 東京工業大学 教授

いっしょに話ませんか  
子ども、学校、教育を

分科会

🕒 13:00 ▶ 17:30

<https://www.kenkyoken.com/> 申込

伊藤亜紗 (いとうあさ) さん

美学者 専門は美学、現代アート

東京工業大学 教授

/ 科学技術創成学院 未来の人類研究センター

/ リベラルアーツ研究教育院

/ 環境・社会理工学院

## ■全体集会・記念講演 (講師はオンラインでの参加です)

- 全体集会は上伊那農業高校がメイン会場です。全体集会・記念講演は全て on-line でも配信します。
- 上伊那農業高校がパブリックビューイング会場になります。(伊那中にはありません)

## ■開催分科会・開催方法

開催方法・会場	分科会 (h) … (hybrid)
オンライン	1国語教育 2外国語活動・外国語教育 3社会科教育 4算数・数学教育 10 家庭科教育 11保健体育教育 13総合学習・生活科 16特別支援教育と障害児の教育 17幼年期・低学年の教育と保育問題 18青年期・定時制・通信制の教育 19子ども・青年と進路 20平和・人権と国際連帯の教育 21教育条件整備 22学校給食と食教育 23環境・公害と教育 24現代文化・図書館教育 27ジェンダー平等
上伊那農業高校	5理科教育(h) 7音楽教育 8書写・書道教育 12学校保健 14学校づくり・教育課程(h) 26高校改革・入試制度(h) 28特設(h)…地域連携・赤穂高校の生徒の発表
伊那中学校	6図工・美術教育 9技術・職業教育 15生活指導 25子どもの権利条約が生きる学校 (不登校いじめ問題)

※第14・26分科会は上伊那農業高校に変更 ※伊那中にはWIFI環境なし。※理科は11/3(日)も実施。

### 県教研ウェブサイトで詳細を確認・レポートをダウンロード

開始・終了時間、持物、レポート等、事前に県教研ウェブサイトでご確認ください。

レポートは、各自ダウンロードするなど、ご用意ください。会場でのレポート配布はありません。